様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７００６９４

研究課題名（和文）実践的指導力を育む大学授業と教育実習の連関ー運動を見る力と指導言語に着目してー

研究課題名（英文）Relationship between university courses to develop practical teaching skills and teaching practice

研究代表者
七澤　朱音（NANASAWA, Akane）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０５１３００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　全期間で実施した模擬授業と、平成22年度と平成24年度実施の教育実習の比較から、以下の内容が明らかになった。教育実習前の２年次に行う模擬授業では、①与えられた教材例を元に、その学習のねらいを読み解く形で指導案を作成すること、②同一人物が同じ教材を2回実践し、その間に自らの指導言語を分析すること、③教育実習と大学の模擬授業で扱う運動領域を連関させ、さらに映像などを用いて実際の児童・生徒の実態をよりリアルに把握して教材研究と模擬授業に臨むこと、以上の三点が有効であることが示唆された。これらの取り組みにより、実習前・中の実践的指導力を向上させることができると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to practice teacher training curriculum for practical competence development, and to discuss a coherent system between university and teaching. The main results were as follows: 1) Provide pre-service teachers with prescribed teaching plan and let them understand the aims were effective to give practical PE lessons .2) Practice micro-teaching twice and analyze their instruction between lessons was effective to understand and to improve teaching.3) Associate university’s courses with a practice teaching was important to enhance student's practical instruction abilities in teaching.

研究分野：体育科教育学

キーワード：模擬授業　教育実習　連関

１．研究開始当初の背景

近年、指導力不足の教員が問題視されており、2004 年には 566 名、2008 年には 306 名が認定されている。この数値は、現場教員の力量を問うものだけではなく、教員になる前の養成段階におけるカリキュラムの在り方をも問うものである。諸外国では、Donald.R と Thomas.J(1991)が、教師が自らの授業を省察し、日々の授業を改善して行くことの重要性を述べており、Wright(1996)は、教員志望学生が教員養成過程での省察を行うプログラムを通じて、教育現場に行くための準備を行うことの重要性を述べている。諸外国には、他に年間を通して教育現場で実習を行い、大学と現場を行き来しながら力量形成を図る大学も存在する。

一方日本では、教育実習は多くの大学が 3～4 週間であり、大学と教育現場は依然として連携できていない現状がある。中央教育審議会（1997）は、「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」を示し、その中で「何よりも大学自身の教職課程の改善・充実に向けた主体的な取組が必要である」と述べている。しかし、果たして各大学の取組が、実際に具体的な成果を得ているのだろうか。疑問が残る。

保健体育科の教員養成に着目すると、教師としての有効な教授技術やよい体育授業を実現可能にする授業評価方法などの研究（高橋ら，1991）をはじめとして、着任当初から高い資質を発揮できる教師を育成するために模擬授業や教材研究などのカリキュラムが進んでいる（小松崎，2008）。しかし、大学の学部で行われるこれらの実践が、その後の教育実習や教員に採用された後の実践に生かされにくい、という課題は依然として残されている。

２．研究の目的

本研究は、将来体育科・保健体育科の教職に就く大学生が、在学中に実践的な力量を身につけるための模擬授業の手法とその成果の検証を量的・質的分析により検討し、模擬授業を行ったことによる指導言語の変容を教育実習中の教師行動の分析から明らかにすることを目的とした.

３．研究の方法

(1)模擬授業 A（小学校対象）の実施方法

全研究期間の前期（6 月～7 月）に、小学校教員養成課程の選択必修科目「ボール運動」で、「ボール運動系」の模擬授業を実施した。グループ編成を 1 チーム 6～7 名（計 3 チーム）とし、教師役が一度授業を実践したのち、課題を児童役と討議し指導案を改良、別の週に同一教材を、違う児童役に教える方法論を採用した。この全 2 回の模擬授業の間に、録画しておいたビデオを用いて自らの指導言語を分析する機会を設けた。

(2)模擬授業 B（中学校対象）の実施方法

全研究期間の後期（12 月～2 月）に、中学校教員養成課程の必修科目「保健体育科教育法Ⅱ」で、模擬授業を実施した。グループ編成は（1）と同様とした。本研究の目的である“教育実習と模擬授業の連関”の効果を探るため、平成 25 年度は教育実習で指導する「器械運動」を模擬授業でも取り上げ、さらに実際の中学生（技能下位）とモデル試技を比較しながらグループ内で下位教材の系統性と段階的指導を検討した。そしてこの過程を経てから、模擬授業を実施した。

(3)教育実習中の指導言語の分析

教育実習で指導する運動領域を模擬授業で扱わなかった実習中（平成 23 年度）の指導言語と、教育実習・模擬授業ともに「器械運動」とし両者に連関をもたせた実習中（平成 25 年度）の指導言語を比較・分析した。指導言語の分析には以下のカテゴリーを用いた。

① フィードバックの量と内容

運動学習場面において、教師から生徒に与えられたフィードバックの頻度を量として捉えた。そして、それを肯定的・矯正的・否定的、発問、励ましに分類して、内容を分析した。

② フィードバックの「表現のしかた」

「表現のしかた」に属する以下 5 つのカテゴリーに当てはめ、頻度を分析した。具体的内容は、双向性（教師と学習者の双方向的な言語的相互作用）、伝達性（教師が発するメッセージが確実に学習者に伝達されている言語的・非言語的フィードバック）、共感性（感情移入を伴った言語的・非言語的な肯定的フィードバック）、表現技術（表現テクニックを伴ったフィードバック）、言語内容（学習者が容易に理解できるように工夫された言語）である。

(4)データの収集・分析方法

①模擬授業の成果検証方法

「期間記録法」を元に、授業で配分された時間の変容を捉えた。また、「逐語記録法」を用いて、直接的指導場面における指導言語を全て打ち出し、1 回目と 2 回目の変容を捉えた。授業後の「評価シート」の評価点では、１回目と 2 回目の授業評価の変容を対応のない t 検定を用いて分析した。「自由記述」の分析には、SPSS Text Analytics for surveys を用いて、単語の出現頻度と「共起」する頻度をもとに分析した。

②教育実習の成果検証方法

教育実習生が行った授業（器械運動）の運動学習中の「フィードバック」を分析し、頻度と内容を捉えた。フィードバックの分析には、双方性、伝達性、共感性、表現技術、肯定、矯正、否定、発問、励まし、のカテゴリーを用いた。

(5)統計処理と解析ソフト

数量的なデータの分析には、SPSS statistics BASE を用い、自由記述の分析には、SPSS Text Analytics for surveys を用

いた。有意水準は 5%未満とした。

４．研究成果

(1)模擬授業の分析

「期間記録法」を用いて「ボール運動」における模擬授業の分析を行ったところ、全 15 分のところ、導入に 1 回目は 2 分 12 秒、2 回目は 2 分 16 秒費やしていることが明らかになった（図１）。

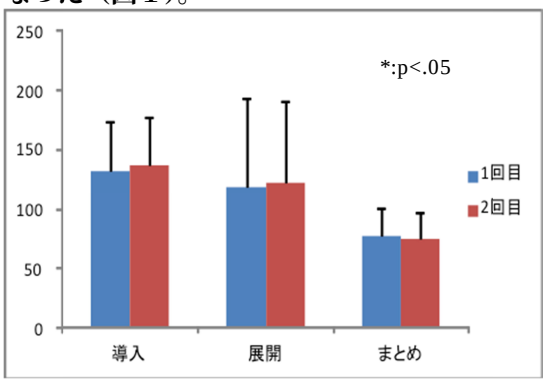

図１　模擬授業（１回目と 2 回目）の時配

次に、「逐語記録法」による指導言語の分析では、1 回目で教師役が不必要だと判断した内容（平均 22.6 個）が 2 回目（平均 8.6）で有意に減少し、指導内容を厳選できるようになっている様子が明らかになった（p<.05）（図２）。ここでは、発問と指示、説明が一つのまとまりのある文章の中に同時に出現した場合や、異なった学習内容が一つのまとまりのある文章の中にいくつも混在している場合といった「複合」の文章の変容も分析した。

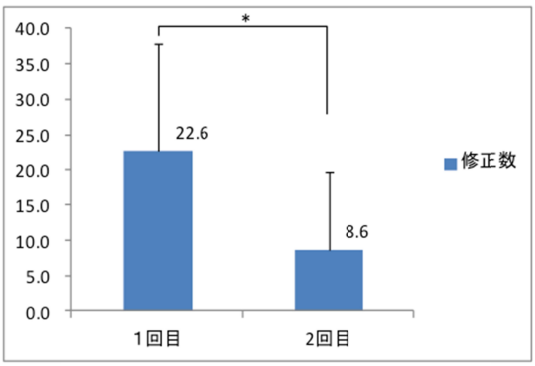

図２　導入場面において不必要な内容だと判断した内容

結果、平均 4.9 回から平均 4.1 回に減少し、説明で用いる指導言語が整理されていく様子が明らかになった。

授業後の「評価シート」の分析では、教具以外の、学習課題、演示、発問、その他に関して、有意に評価点が上昇した（p<.01）。しかし、評価シートの得点の高まりと実際の指導場面の実態は離れており、評価シートの作り方に関しては課題が残った。

「自由記述」のキーワード抽出による頻度分析を用いて「保健体育科教育法Ⅱ」における記述内容を分析したところ、「実際」、「恐怖心や心理的不安（実際の中学生たちの）」といった内容が頻出した。実際の生徒達の映像を観て教材研究を行ったことで、より具体的な中学生の姿を想像でき、共感的に記述するようになったのだと考えられる。

また、教育実習と模擬授業に連関がなかった平成 22 年度の自由記述の共起分析では、関連性の乏しい単語の共起が現れた（図 3）。

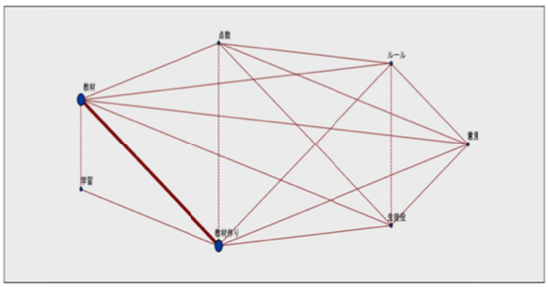

図３　教材づくりについての共起（平成 22 年度）

一方、教育実習と模擬授業に連関のあった平成 24 年度の自由記述の共起分析では、「教材・教材づくり・中学生・できる・下位等」多くの単語が共起し、受講者の省察がより複雑に絡み合っていることがわかった（図 4）。

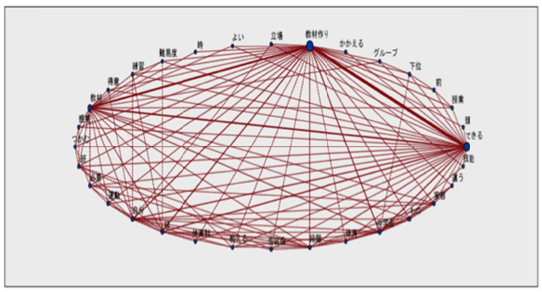

図４　教材づくりについての共起（平成 24 年度）

特に学校現場の実態を把握したことによって、実際の中学生を想定したリアルな教材研究と模擬授業が展開できた。受講者達は、より多くの引き出し（知識）を得て、それらを多角的に用いながら教材づくりを考えることができるになったのではないだろうか。

(2)教育実習の分析

教育実習で指導する運動領域を模擬授業で扱わなかった平成 23 年度の実習中の指導言語と、教育実習・模擬授業ともに「器械運動」とし両者に連関をもたせた平成 25 年度の実習中の指導言語を分析した。

フィードバックの量と内容の分析では、平成 25 年度の方が平成 23 年度より、具体的なフィードバック（specific feedback）を行っていることが明らかになった（図 5）。

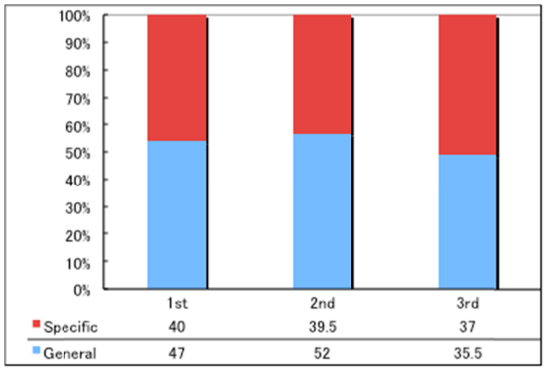

図 5 Percentages for “dimension of concreteness” in 2013

(3)フィードバックの「表現のしかた」

「表現のしかた」の「伝達性（教師が発するメッセージが確実に子どもに伝達される）」は、24 年度の方が多く出現していた（図 6）。教育実習と連関した模擬授業を大学で経験していたことにより、教育実習での指導内容がより明確になり、教育実習生がそれらを正確に伝えようとしたのではないだろうか。そして、その情報が生徒達に確実に伝わっていたのではないだろうか。このデータから、これらの知見が推察された。

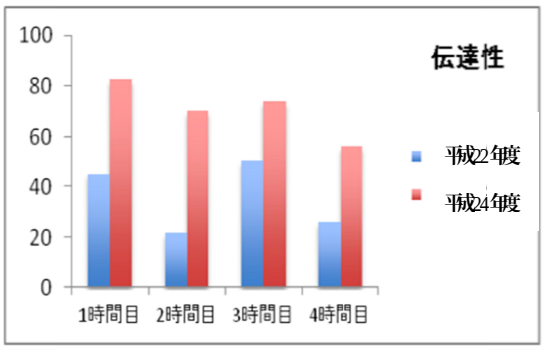

図 6　「伝達性」の比較

総じて、全期間で実施した小学校課程と中学校課程の模擬授業と、平成 23 年度と平成 25 年度実施の教育実習の比較から、以下の内容が明らかになった。教育実習前の２年次に行う模擬授業では、①与えられた教材例を元に、その学習のねらいを読み解く形で指導案を作成すること、②同一人物が同じ教材を 2 回実践し、その間に自らの指導言語を分析すること、③教育実習と大学の模擬授業で扱う運動領域を連関させ、さらに映像などを用いて実際の児童・生徒の実態をよりリアルに把握して教材研究と模擬授業に臨むこと、以上の三点が有効であることが示唆された。これらの取り組みにより、実習前・中の実践的指導力を向上させることができると考えられる。

＜主要引用参考文献＞

Donald R, Hellison, Thomas J Templin(1991) A Reflective approach to teaching physical education.
深見英一郎・高橋健夫・日野克博[他]・吉野聡（1997）体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討 - 特に,子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に - 体育學研究，42（3）,167-179.
小松崎敏（2008）体育教師教育における教科に関する指導力の育成についての考察−受講生の主観的評価からみた体育模擬授業の成果−．びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要第 5 号，61-68
久保研二・木原成一郎・大後戸一樹（2008）小学校体育科授業における「省察」の変容についての一考察. 体育學研究, 53(1),159-171.
阪田尚彦（1990）体育の授業と教授技術，大修館書店
高橋健夫（1991）体育の授業をつくる，大修館書店
Wright,Steven(1996)Case-based instruction: Linking theory to practice, Physical Educator, Early Winter96,Vol.53 Issue 4,p.190,18p
吉崎静夫（1988a）授業研究と教師教育（1）- 教師の知識研究を媒介として -．教育方法学研究日本教育方法学会紀要，13,11-17.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 4 件）

①七澤朱音，日本スポーツ教育学会第 34 回大会（2014）
「実践的指導力を育む大学授業と教育実習の連関（4）」2014,10,25（愛媛大学：愛知県松山市）

②Akane NANASAWA, The 2013 International Conference of the Japanese Society of Sport Education（2013）
「Relationship between university courses to develop practical teaching skills and teaching practice; part Ⅲ」2013,10,19（日本大学：東京都世田谷区）

③七澤朱音, 日本体育学会第 64 回大会(2013)
「実践的指導力を育む大学授業と教育実習の連関（2）」2013,8,30（立命館大学：京都府京都市）

④七澤朱音, 日本体育学会第 63 回大会(2012)
「実践的指導力を育む大学授業と教育実習の連関（1）」2012,8,24（東海大学：神奈川県平塚市）

６．研究組織

(1)研究代表者

七澤　朱音　（NANASAWA Akane）
千葉大学・教育学部・准教授
研究者番号：10513004